

4 稚児ヶ池(ちごがいけ)

都萬神社から西都原古墳群に通じる道際に「稚児ヶ池」があります。もとは「稚児殿池(ちごんどいけ)」と呼ばれていました。周囲約1kmの貯水池で、青々とした水面のはるかに御鈴山を望む、大変見晴らしの良い池ですが、この池には悲しい伝説が残っています。

時代は南北朝時代あるいは室町時代と諸説ありますが、この地方は伊東氏家臣の壱岐加賀守義通の所領でした。



壱岐加賀守義通は、都於郡城への登城にこの地を通っていました。当時、この付近は鶴の池という池があり深い沼田で農民たちは困っていましたので、これを憐れみ、救うために長さ百間、巾五間の堤を築いて沼田の水をせき止め、池をつくることにしました。工事が進み、堤が完成すると大豪雨と雷で堤は破れ、満水の濁流が見る間に田畑を押し流してしまいました。

現在の稚児ヶ池の一部となった鶴の池には、昔、白黒の大蛇2匹が住み、人々を害していました。そこで石貫大明神のお告げで、大蛇は地下八尺の底に埋められていたのですが、このわざわざは大蛇の祟りで、人柱を立てなければわざわざを除くことは出来ないだろうということになりました。

その頃、家臣法元猶之助の三男長千代丸は、学問のためここを通過して国分寺に通っていました。長千代丸は人柱のことを聞き、自らかつてで腹を切り、地下八尺の下に埋められました。当時14歳だったということです。

その後、池は立派にでき、今日も満々と水をたたえています。堤の傍らに社が建てられており、今も往事がしのべれます。



日向国分寺跡に建つ「木喰五智館」

西都は古代日向の都として栄え、政治経済の要の地として、日向の歴史に大きな役割を果たしています。その中心と思われるのが、日向国府と国分寺です。日向国分寺跡は、西都原古墳群の台地の南端近く、三宅にあります。三宅という地名は、屯倉（みやけ）からきているようで、屯倉とは古代大和朝廷の直轄領で穀物を納める倉を称したようです。「日本書紀」の推古天皇 15（607）年に、「国毎に屯倉を置く」という記事がみえます。

聖武天皇は仏教への帰依が深く、仏教によって国家の理想を実現するという鎮護国家の方針から、全国に国分寺及び国文尼寺を建立しました。日向国分寺の初見は、天平勝宝 8（756）年に『続日本紀』のなかに日向国分寺の名がでてきます。しかし何度か火災にあい、現在は古くからの建物などは何も残っていません。国文尼寺は、現在の県立妻高校の校庭内にあったといわれており、学校建設の際、多数の瓦が出土しています。

衰退した日向国分寺を再興したのが、木喰上人です。

● 厳しい木喰（もくじき）修行

仏教の「木喰戒」は、肉や魚はもちろん、米や麦などの五穀も食わず、煮物や味のついた食べ物も禁じています。食べるものは水に溶かしたソバ粉や木の実だけです。木喰上人とは、この戒律を守り修行する僧侶のことで、昔は「木喰上人」は一般的な呼び名でした。大正時代に「木喰の仏像」が注目され、作者の「木喰行道」が有名になり、それ以来木喰上人といえば「木喰行道」を指すようになりました。「微笑仏」など評判の高い木喰仏は 80 歳を超えてからの作品に多いといわれます。

■ 日向国分寺と木喰行道

木喰上人は、享保 3（1718）年に甲斐（現山梨県）で生まれ、14 歳の年に故郷を捨て、江戸に出ます。仏門に入るのは相模（現神奈川県）の大山不動尊に参籠したのちで、22 歳のときです。以来、木喰修行のための流浪生活が 70 年近くも続きます。

44 歳の時に、常陸国（茨城県）羅漢寺の住職 木食観海上人から「木喰戒」を受け「行道」を名乗り修行に励みましたが、安永 2（1773）年、55 歳の時 日本廻国と「千体の仏

像を造る」大願を發し、大山山麓の田中村を出發し、遊行僧として全国行脚の途につきました。寒中でも一枚の着物で通し、長身で髪は乱れ、異様な身なりだったといひます。

念願の「千体造仏」は兵庫県東光寺で達成。すでに90歳になっていました。なおも2千体を目指して旅を続けましたが、3年後に故郷の山梨で生涯を終えました。

宮崎には71歳のときに訪れ、地元住民に求められて国分寺住職になり、寛政9年(1797)4月までの9年間、三宅村に滞在しました。その間、国分寺が火災にあったため、その再建に取り組み木喰彫像中最大作と言われる「五智如来座像」5体を完成させました。

なおこのほか西都市内には、妻恵比須宮のご神体となっている恵比須像など数点の彫像が残されています。

本尊を安置し、堂宇が完成したのち、多くの参詣者が訪れ、特に児湯地方や佐土原城下の者が多く、限りない寄進を受けたといわれます。



堂内には巨大な仏像が並ぶ。釈迦・阿弥陀・大日・阿閃・宝生の五智如来像



6 西の都 アグリ館

■ファミリーで楽しめる観光物産館

西の都・アグリ館は、温暖な気候と清らかな水に恵まれた宮崎県西都市の神楽酒造西都工場内にある観光物産館です。工場見学や焼酎の試飲もでき、水と神話をテーマにしたシアター上映も行っています。焼酎の販売はもちろん、地元の特産品や工芸品なども販売しています。

営業時間／9:00～17:00 休館日 毎週水曜日(祝祭日の場合は翌日) TEL／0983-32-0880
ホームページ <http://www.kagurashuzo.co.jp/index.php?id=81>

1階は試飲コーナーや物産館、2階はアトラクションパークとなっています。2階の「西都清水シアター」では、水と神話をテーマに、動きのある「水」の演出と映像で迫力のあるエンターテインメントが楽しめます。また、足下の床面に映し出される小川を歩くと本物のように泡立つ「タップトーク」や、最新の設備で焼酎のできるまでを見学できるボトリング見学、クイズが楽しめるコーナーなど、焼酎について学びながらファミリーでたっぷり楽しめる演出がなされています。



アグリ館全景



1階の物産館と試飲コーナー



2階の「さいとアトラクションパーク」入り口

7 鹿野田神社(かのたじんじゃ)



■塩水が湧き出る不思議な神社

アグリ館からほど近い西都市鹿野田潮に鹿野田神社が鎮座しています。潮（うしお）神社とも呼ばれ、古くは潮妙現大明神と称し、ホオリノミコト（山幸彦）を祭神としています。海岸から15kmも離れているのに、境内の井戸からは海水が湧き出ていて、御神水とされています。創建ははっきりしませんが、棟札は弘安6（1283）年からありますので、相当古いと思われます。神社の記念碑に、以下のように由緒がつづられています。

「鹿野田神社改修記念碑」

鹿野田神社は、古くは潮妙現大明神と称し彦火火出見尊（海幸彦－山幸彦の神話の山幸彦）を祭神とする、弘安（鎌倉時代後期、1278年－1288年）以前の由緒ある神社である。古来この地方を支配していた、土持（つちもち）、伊東、島津などの領主の崇敬極めて篤く、また永く続いた神仏習合の時代には、恵日山光照寺が別当寺の役割を果たし、その繁栄を共にしてきた。近世になって丸山家歴代その大官司として世襲し、特に寛政（江戸時代後期、1789年－1801年）4年6月には、丸山相模守良記、高山彦九郎（江戸時代後期の尊皇攘夷の思想家で、旅の思想家として膨大な日記を残しています。新富町の観音山にも登って歌を残しています。観音山に石碑があります。）の巡拝を受けて共に時勢を談じ、また文政（江戸後期、1818年－1830年）3年9月には、その嗣子讃岐守良記は、若き日の安井息軒を迎えて一夜を明かした。明治初年新政府により神仏分離となるや、郷社 鹿野田神社と改称し、鹿野田郷鎮守の神として昔に変わらず郷民の崇敬を集めている。

昭和61年11月16日



境内に入ると、すぐ左手に「塩満の泉」と呼ばれる海水の湧き出る井戸があり、御神水となっています。この井戸は日向灘の干満に合わせて水位が上下すると言われています。

井戸の塩水は、飲むと慢性胃腸病、便秘に、浴用としては神経痛、筋肉痛、疲労回復、慢性皮膚病などに効果があると昔から言われています。現在は主に飲用に求める人が多く、地元だけでなく関東、関西地方の愛飲者もいるそうです。



鹿野田神社全景。鳥居脇の大クスは御神木で推定樹齢 300 年、樹高 20m です。



神話の「海幸・山幸」物語では、山幸彦が兄の釣り針を無くしてしまい、それを探しに海底にある海神国の海神綿津見大神（わだつみのおおかみ）のもとへ行き、三年後なくした釣針のほかに潮満玉（しおみつたま）と潮涸玉（しおひるたま）を授かって帰られました。

この「潮満玉（しおみつたま）と潮涸玉（しおひるたま）」が鹿野田神社の御神体となっていて、「塩満の泉」は、その御神徳といわれています。

平安時代の有名な女流歌人和泉式部は八代（国富町）の法華嶽薬師に参籠した後、帰郷の途中再び病となり鹿野田氷室の里（潮）までたどりつきこの潮満の泉で湯治をと思ったのか、近くの薬師堂に籠り読経三昧の日を送り、ついにこの地で 43 才の生涯を終わったと伝えられています。（墓が近くにあります。）

8 都於郡城跡(とのこおりじょうあと)

■伊東氏栄枯の跡

今から 400 年ほど前の日向の中心地は都於郡でした。都於郡城は、南北朝時代から室町・戦国時代にかけて 242 年間にわたって伊東氏累代の居城でした。平地に屹立した自然の山丘を利用して築かれ、西側は断崖でその外側を流れる三財川が外濠の役目を果たしていた堅固で広大（高さ約 100m、東西 1,000m、南北 500m）な城で、別名『浮船城』とも呼ばれ、城下を流れる三財川に美しく映えていたといひます。

伊東氏は曾我兄弟仇討ちで知られる工藤祐経（すけつね）を先祖にもつ一族で、建武 2（1335）年に 6 代祐持（すけもち）が日向国に下向して以来、都於郡城・佐土原城を起点として支配地域を広げていきました。島津氏から飢肥城を奪って隆盛をきわめた 10 代義祐（よしすけ）は、その雄大な姿を「春は花、秋は紅葉に帆を上げて、霧やかすみの浮き船の城」と詠んでいます。

伊東氏は全盛時代には、都於郡城を中心に 48 の出城を持ち、「伊東 48 城」と称せられるほどでした。しかし、元龜 3（1572）年、島津氏との木崎原の戦いに大敗し、天正 5（1577）年、この城も島津氏によって落とされてしまいました。そして伊東一族は親族の大友宗麟を頼って大分に落ちのびていきます。いわゆる『伊東一族の豊後落ち』です。なお、後に天正遣欧使節の伊東マンショはこの城で生まれ、大友宗麟のもとに落ちのびる一行のなか



三財川と都於郡城跡



伊東 48 城の看板



都於郡城曲輪跡



城跡に立つ「伊東マンショ」像

●中世日向の三大豪族

中世の日向には、日下部氏や三田井氏、土持氏などがおり、古代から中世にかけて関東から下向してきた伊東氏などと覇を競っていました。さらに南北朝時代には足利尊氏が畠山氏を派遣したので、勢力争いは複雑になり、戦乱が続きました。

土持氏

日向で最も古い豪族であったといわれています。土持氏の祖については諸説ありますが、『延陵世鑑（えんりょうよかがみ）』によると、土持氏の元祖は反正天皇5世の孫である直亥宿禰（なおいすくね）で、欽明天皇の31（570）年に宇佐八幡宮建立に功績があり、天皇から土持の姓と日向国を賜り、吾田の荘に住んだといっています。しかし『日向国史』では「この説は信じられないが、土持氏が勢力を広げていたのは事実で、その宗家は県（あがた・現在の延岡）にあり、その支族は財部・大塚・清水・都於郡・瓜生野・飢肥にいます。県を含めこれを土持七頭といっている」と述べています。

土持氏は早くから日向国に勢力を持った豪族で、宮崎北部や中央部で活躍していましたが、南北朝の終わり頃から次第に勢力を失っていきました。伊東氏が宮崎平野で支配権を確立していく課程では土持氏の協力を仰ぎ、協力して島津氏に対抗していました。

しかし、伊東氏が勢力を伸ばしていくと次第に土持氏を排除するようになっていき、そして財部土持氏は長禄元年（1457）伊東氏に滅ぼされ、残された県土持氏は天正6（1578）年、大友氏に滅ぼされました。

伊東氏

伊東氏の歴史を詳しく述べた『日向紀』によると、伊東氏は藤原氏の出であると伝えられます。藤原鎌足・不比等の子孫の為憲（ためのり）が木工助に任じられ、その後、「藤と工」の字をとって工藤氏を称しました。その後、為憲（ためのり）6世の孫惟職（これもと）は伊豆の宇佐美、伊藤、河津の三荘を領し、工藤を改め伊藤と称し、のちに伊東に改めました。しかし、惟職（これもと）のひ孫祐継（すけつぐ）の子祐経（すけつね）の代でまた工藤氏を称しました。祐経（すけつね）は源頼朝に仕え、建久元年（1190）に日向の地頭職に任じられました。日本三大仇討ちの一つといわれる曾我兄弟の仇討ちで討たれるのが、この工藤祐経（すけつね）です。

曾我兄弟の仇討ちは、建久4年に源頼朝が富士の巻狩りを行った際に、蘇我祐成と蘇我時至の兄弟が父親の敵である工藤祐経を討った事件で、赤穂浪士の討ち入り、伊賀超えの仇討ち（荒木又右衛門が有名）と並ぶ日本三大仇討ちの一つ。

曾我兄弟の仇討ちは、江戸時代に能や浄瑠璃・歌舞伎・浮世絵などで取り上げられ人気を博した。

※仇討ちをされるというと、非常に悪い事をしていた人物に思えますが、原因は一族の所領争いであり、現代の感覚で正悪の判断はできないことと思えます。

祐経の子祐時（すけとき）は再び伊東氏を称しました。祐時には11人の男子がいましたが、そのうちの3人が日向国・田島、日向国・富田荘と県荘、諸県荘・木脇を領し、田島氏、門川氏、木脇氏の祖となりました。3氏はそれぞれ大いに勢力を伸ばし、後の伊東氏躍進の元をつくっています。

伊東氏は日向国に広い領地を持ちながら一族を代官として下して、伊東氏本統は、祐経（すけつね）・祐時（すけとき）・祐光（すけみつ）・祐宗（すけむね）・貞祐（さだすけ）と5代にわたって日向に下向しませんでした。

伊東本家が日向入りしたのは、建久元年（1190）のことで、6代祐持（すけもち）が足利尊氏に従って戦功があり、恩賞として都於郡300町を与えられたことによります。

祐持は都於郡城を築き、日向各地に勢力を伸ばしていきます。南北朝時代に入ると、日向国でも土持氏、島津氏、伊東氏、その他の豪族たちが南朝方（宮方）と北朝方（武家方）に分かれ、激しく戦いました。伊東氏は武家方として戦い、勢力を広げ、48の城を持つ日向第一の豪族に成長していきました。

島津氏

都城盆地には古代日向隼人が居住していましたが、11世紀前半（万寿年間）に平季基（たいらすえもと）が日本一広大な島津荘を開発し、関白藤原頼通（よりみち）に献上しました。文治元年（1185）に源氏は平氏を滅ぼし、この年に源頼朝は全国の荘園にご家人や在地武士を地頭に任命しています。文治2（1186）年、惟宗忠久（これとうただひさ・のちに島津氏に改姓）が島津荘の地頭に任じられ、さらに建久7（1196）年に、薩摩・大隅・日向の守護になり、建久8年に島津荘に現れました。忠久は3国の守護、島津荘の地頭でしたが、当時は土持氏や肝付（きもつき）氏など有力豪族の勢力が強く島津氏の威令がすみずみまでとはとどきませんでした。

その後、4代忠宗（ただむね）のころから勢力が盛んになり、忠宗の6男資忠（すけただ）が戦功をあげ、足利尊氏から北郷300町を任されて、名も北郷氏と改めました。

北郷資忠の代から、島津氏は都城盆地や日向国南部で勢力拡大が始まりました。なお、資忠の子義久が天寿元年（1375）、都島に城を築いて「都」の字をとって「都之城（みやこのしろ）」と称し、のちに都城（みやこのじょう）の地名になりました。

●伊東氏対島津氏 ～日向支配をめぐる争い～

伊東氏と抗争する島津氏は、大隅・日向南部を支配し山東への進出を狙っていました。一方伊東氏は、都於郡城という要害堅固な城を拠点に日向第一の武将にのしかがっていました。そして、これまで協力して戦ってきた財部（高鍋町）の土持氏を滅ぼし、日向中央まで平定しました。つぎに目指すのは山西への進出でした。

伊東氏は、肥沃な三俣千町（山之口、高城、三股）と海外貿易もでき、山海の資源豊かな飢肥（おび）を狙っていました。

文明16（1484）年、伊東氏は飢肥城の新納（にいろう）氏を兵16,000で攻撃しました。翌年、島津忠昌（ただまさ）が新納氏に援軍を送ったため、伊東氏の当主祐国（すけくに）が戦死するなど打撃を受け、敗退しました。その後、伊東氏と島津氏は飢肥城をめぐる83年間も攻防を繰り返しました。この飢肥城攻防戦は日本史上最長の記録となります。

その後、飢肥城や肥沃な都城盆地をめぐる、伊東氏と島津氏の争いは約150年間もの間一進一退をくりかえし、多くの武将が亡くなっていきました。永禄4年（1561）、伊東義祐（よしすけ）は飢肥を手に入れました。いったんは島津側に取り返されますが、永禄11（1568）年から伊東氏が支配することになりました。

伊東義祐（よしすけ）が飢肥城を攻め落としたころが伊東氏の全盛期で「伊東48城」といわれたのもこの頃です。

伊東義祐（よしすけ）は、次男の佑兵（すけたけ）を飢肥城主に、自身は佐土原城を隠居城として贅沢な生活を送っていました。のちに仏門に入って三位入道と称しています。

元龜3（1572）年、伊東義祐は島津軍と木崎原（えびの市）で大激戦を展開しますが大敗し、この敗北が伊東氏没落の原因となりました。その後、伊東氏は急速に滅亡の一途をたどり、48の城は次々と落ちていきました。

ついに伊東義祐（よしすけ）は都於郡城を捨て、遠縁にあたる大分の太友宗麟（おおともそうりん）を頼って逃げ出しました。世にいう「伊東一族の豊後落ち」です。一行120余命は雪の舞う険しい九州山地を島津軍に追われながらの悲惨な旅でした。

落人の一行の中には、6歳になる伊東マンショもいました。

9 黒貫寺(くろぬきじ)

■由緒ある古刹・もとは日向第一の寺院

開山は天慶9（946）年、隆元僧都によるとされています。真言宗 智山派で、伊東氏が都於郡を治めていた時代には日向第一の寺院として大いに栄えていました。

伊東氏が島津氏に追われ大分県に逃れた後も、佐土原藩主島津（前島津と後島津）の加護を受け、江戸時代には365石の寺領を有して寺内に本堂経蔵宝物倉書院茶宴殿などの諸堂が建ち並び、寺運は隆盛しました。

高台となっている寺域一帯はうっそうとした老杉におおわれ、いかにも由緒ある古刹の趣があります。しばしば火災にあい、特に明治17（1884）年の火災で惜しくも宝物・文書類のほとんどを消失してしまいました。現存するものは末寺の久峰寺から移築したもので、本堂・観音像などがあります。

景行天皇がクマソ征伐のとき、この地に6年間留まられたという高屋宮跡と伝えられています。また、すぐ近くには景行天皇をまつた高屋神社があります。（宮崎市村角の高屋神社も高屋宮跡と伝えられています）



●景行天皇

『日本書紀』によれば、景行天皇は古代国家統一期の英雄として登場します。景行天皇は多くの妃を迎えられたので、生まれた御子は男女合わせて80人だったといえます。これらの御子は諸国（日本各地）に赴かれた。諸国でワケ（別）を名乗る人たちはその子孫であるとされています。なお、景行天皇13年5月に襲（ソ・クマソ）の国を平定され、日向の高屋宮で迎えられた妃が御刀姫（みはかしひめ）といわれています。この時、天皇は日向の高屋宮に6年おられ、後の日向国造（ひゅうがくにのみやつこ）の先祖とされている豊国別皇子（とよくにのわけのみこ）が生まれたとされています。

古事記では、クマソや出雲を平定したのはヤマトタケルノミコトとされています。また、景行天皇は実在性が議論されている天皇でもあります。

景行天皇17年の春3月に児湯県（こゆのあがた・現在の西都市）に御出になり、お側の者に言われた。「この国は真っ直ぐに日のでる方に向いている」と。それで名付けて「日向」と呼ぶようになったといわれています。

10 巨田神社(こたじんじゃ)



■南九州で珍しい中世建築様式を残す見事な本殿

行政域は西都市から少しはずれますが、黒貫寺の近く、宮崎市佐土原町に巨田神社があります。中世にこの地を治めた田島氏をはじめ、伊東氏、島津氏の厚い尊崇を受けました。

寛治7（1093）年、宇佐神領時代に鎮守社として創建されたもので、本殿は流麗な三間社流造（国重文）で、中世の技法をそのまま伝えています。棟札（国重文）によって、文安5（1448年）に修造されたのち、永正5（1508）年、天文19（1550）年に再興を経ていることが確認できます。また、両側の摂社（若宮社、今若社）も本殿と同じ古い建物と考えられています。

毎年11月15日前後に秋の例祭があり、巨田神社境内で農作物の収穫を祝い、古くから「巨田神楽」が舞われています。

神社正面に「巨田の池」があります。上池・下池からなっていて、下池が「巨田の大池」にあたります。天正年間（1573～1591）からあったと資料に書かれている非常に古くから存在した地域の大切なため池です。この池にはたくさんのカモが飛来し、古来から「越網（こえあみ）」（県指定無形民俗文化財）という狩猟法が残っています。佐土原藩士の鍛錬のためにカモ採りを行っていたのがはじまりで、現在も地元保存会によって守られています。



鬱蒼とした社寺林の巨田神社



巨田神社前にひろがる「巨田の池」